

研究ノート

進行過程としてみる“モノ探し”の諸行為 —— “モノ探し行動” についての小考 (5) ——

佐々木 土師二

An approach to the behavior of “looking-for-something” (Part 5)

Aspects of specific actions in the proceeding process
of the search for lost objects

Toshiji SASAKI

Abstract

69 items of the specific actions in the behavior of “looking-for-something” were compiled from 10 internet-sites, and were classified into 15 categories. These categories were classified into four behavioral stages of the search behavior, as follows: problem recognition, start, searching and finish stages. Subsequently, the psychological problem of the proceeding process of search behavior was discussed.

Keywords: search behavior, lost object, specific action, looking-for-something, proceeding process, behavioral stage

抄 録

インターネットの10サイトから収集した“モノ探し”の具体的行為の69項目を、その内容によって15カテゴリーに分類し、これらのカテゴリーをモノ探しの進行状況を表す4段階（問題認知、開始、探索、終了）に整理した。そして、これらの諸行為の関連性を想定し、モノ探しの“進行過程”について考察した。

キーワード：探しもの、モノ探しの具体的行為、モノ探しの進行過程

1. 目的：“モノ探し”の進行過程へのアプローチ

われわれの“モノ探し”では、通常、探索の場所を移動したり時間を費やしたりし、その間にさまざまな行為をしているが、その状況は“モノ探しの進行”ということができる。その進行状況について、佐々木（2018）は、基本的には、「探索区域（Space）の縮小」と「探索時間（Time）の短縮」とに集約されると考えて、それが連続的にあらわれる様相を「STピラミッド型モデル」として、本稿では後掲の図3に示すように、図式化している。つまり、その図式モデルは、“モノ探し”の開始から完了までが目標（対象物を探し出すこと）に向けての連続的な過程（プロセス）であると想定されているが、その進行過程

において、われわれがどのような行為をするかについては述べていなかった。ただ、「探索区域の縮小」と「探索時間の短縮」がモノ探しの“進行度”をあらわすということは指摘していた (p.82)。

そして、この第1稿 (佐々木, 2018) につづく一連のペーパー「“モノ探し行動”についての小考」 (佐々木, 2019a, 2019b, 2020) では、その“具体的側面”に注目して、第2稿 (佐々木, 2019a) では「問題解決的な行動」として“探索意思決定の類型”について検討し、第3稿 (佐々木, 2019b) では「モノ探しにおける具体的行為の収集とそのモデル化」を試み、さらに第4稿 (佐々木, 2020) では「呪術的方法の利用」についてインターネットで収集した情報にもとづく分析を行っていた。

そのうちの第3稿では、インターネットの「探し物を見つける方法」のカテゴリーの中で“探し物の具体的方法”を項目化している10サイトから、具体的行為の69項目を収集しリスト化した。そして、これらの項目を“行為の実施・遂行”に関する51項目と、“意欲の喚起・維持”に関する18項目に大別し、前者の“行為の実施・遂行”に関する項目を内容にもとづいて12カテゴリーに分類したうえで、それらをモノ探しの進行状況の3段階 (開始→探索 (探索地点内行為) →終了) に整理して、モノ探し行動の様相を理解しようとした。他方、後者の“意欲の喚起・保持”に関する項目は、“ポジティブな態度”と“クールな態度”に2分したが、モノ探しの進行状況との関連付けは行わなかった。

そこで、本稿では、モノ探しの“進行過程”における具体的行為に注目するという観点から再検討を行い、第3稿の分析を補正することを意図した。このことは、モノ探し行動を構成する具体的行為の諸相を把握するとともに、その行動の変化を通して探索過程の“流れ”を描くことになる。

2. 分析：インターネットの10サイトから収集した69行為の分類

(1) 分析方法の踏襲と対象データの拡大

本稿の分析手法は、第3稿と同様に、次の手順をとった：

1. リスト化された具体的行為を内容によってカテゴライズする。
2. それらの行為カテゴリーをモノ探しの進行段階のなかに位置付ける。

しかし、分析対象データである“具体的行為のリスト”は、第3稿で対象とした“行為の実施・遂行”に関する51項目だけでなく、“意欲の喚起・維持”に関する18項目を加えた69項目を含むものとした。

（注）対象データである69項目は、第3稿の表1にサイト別に一括表示されているが、本稿の表1にもカテゴリー別に整理した結果を示している。

この対象データ拡大により、具体的行為のカテゴリー化で“意欲の喚起・維持”に関する18項目の内容を反映したカテゴリーを新たに加えることになった。また、各項目の内容を再吟味して、第3稿で示したカテゴリー構成やカテゴリー名称を変更し、若干の項目をより適切なカテゴリーに移すことも行った。

その結果、15カテゴリー（「非該当」の1項目を除く。）が構成されたが、それを示したのが表1である。ここでは、さらに4段階を設けて、大分類として各行為カテゴリーを整理している。

表1 モノ探しの具体的行為の分類

問題認識段階の行為

① ポジティブな態度を持つ：

前向きに考える（A1-3）、具体的に考える（A1-4）、自信を持つ（A1-5）、探し物は必ず見つかると思える（B2）、探すときは偏見を持たない（C6）、とにかく、先入観をなくする（E3）。

② クールな態度を持つ：

まず落ち着く（A1-2, C1, F1, H1）、深呼吸する（A1-2）、まずお茶を飲んで冷静さを取り戻す（B3）、頭の中をクリアにする（C2）、冷静になって記憶を整理する（D4）、すぐには探し始めない（B1）。

開始段階の行為

③ 発見可能性の高い区域・場所の見当をつける：

ありそうな場所をリストアップ（C4）、ありそうにないが、可能性としてあるかも知れない場所を探す（C7）、落ちているかも知れない場所を30個くらい書き出す（E②）、「失くした物」ではなくて「失くした物が見つかる可能性のある場所」を見つけるように心掛ける（E④）、俯瞰し探すエリアを決める（確率が高い場所を優先する）（F2）、極めて確率の低いエリアは除く（F5）、（なくした可能性が高い場所から順に）リストを書き出す（I2）、（家の中で）探し物がありがちな場所を知っておく（J2）。

④ ありそうな場所を探す：

いつも置く場所を探す（A2-1）、計画的に探す（A2-3）、ありそうな場所を順番に落ち着いて探す（C5）、一番可能性の高い場所では、特に慎重に周りを見渡す（E2）、失くしたと思われる場所に立つ（E①）。

⑤ 失くした時の状況を思い出し、それと同じ行動をする：

失くした時の状況を思い出す（J1）、（失くしたことがある）同じ場所を探す（A2-9）、少しずつ過去へ記憶を戻してその時の行動を実際にしてみる（B8）、家の中で同じ行動をして思い出す（同じ行動をしつつ周辺を探す）（H2）。

⑥ 失くした時、最初にしたことを思い出し、そのことを行う：

（失くした状況で）自分の行動をやり直す（A2-8）、最初思い浮かんだところを探す（B4）、失くした当日と同じ行動をとりながら思い出す（E1）、まずは冷静に行動を振り返り、同じ行動をする（G1）。

⑦ 失くした時、最後にしたことから始める：

最後に使ったところを思い出す（B5）、最後に使ったのはいつか思い出す（C3）、自分の行動を逆算していく（I1）。

探索地点内の行為

⑧ 手近なところを探す：

いつも置く場所を探す（A2-1）、ポケットを確認する（A2-6）、クルマの中を探す（A2-7）、目の前を探してみる（B6）。

⑨ 視野を変えて探す：

普通では考えられない場所も探す（A2-4）、別の視点から探す（A2-11）、視野を広げて探してみる（B9）、一番なさそうな場所から探す（I3）。

⑩ じっくり探す：

しっかりと見る (A2-5)、そのエリア内をよく探す (F3)、複数回探す無駄をなくす (F4)、目だけでなく、五感をフルに使う (G2)、丁寧に拭き掃除しながら探す (G3)。

⑪ 一度探したところを再確認する：

一度探したところを再確認する (B7)、もう一度、最初に探した場所を探す (D1)、最初に探した場所の周辺を探す (D2)、何周もする、一周で見つかるとは限らない (G5)、もう探したからと諦めずもう一度探してみる (H4)。

⑫ 失くした物を探しながら探す：

探し物に呼びかけてみる (B10)、失くしたモノを言いながら探す (D3)、失くした物の名前をつぶやき続ける (E③)。

⑬ 休息したり気分転換を図る：

休息を取り入れ脳を休める (C9)、イライラしたら休む (G4)、いったん探し物を止めて気分転換する (H3)。

終了段階の行為

⑭ ほかの場所にあるかも知れない (転換)：

探し物は誰かが持っているかも？ (B11)、他の人が持っているのではないか (C8)、(家ではなく) 外出先にある可能性も探る (D5)、行った場所に電話をかける (A2-10)。

⑮ 探すのを止める (中止)：

どうしても見つからない時、キッパリ諦める (B12)、それでも見つからなければ断捨離の出番 (C10)、非該当……片づける (A2-2)。

(2) “過程”としてのモノ探しの進行の中に位置づけた行為カテゴリー

こうして15カテゴリーは行動内容の違いを反映した4段階に分類されたが、各段階の意味は次の通りである：

- (1) 問題認識段階…モノ探しをする必要が生じたことを認識し、その心構えをする。
- (2) 開始段階……モノ探しを始めるにあたり、探し方の方針を立て、具体的に着手する。
- (3) 探索段階……探索場所を特定化し、その地点内でモノ探し行動を実行する。
- (4) 終了段階……特定地点内でのモノ探し行動を止める。

ここで示された4段階は、第3稿で設定していた3段階に「問題認識段階」が第1段階として追加されたもので、そこには「意欲の喚起・保持」に関する18項目のなかの6項目がカテゴリー①「ポジティブな態度を持つ」として、また、9項目(「まず落ち着く」にはほぼ同じ内容の4項目がある。)がカテゴリー②「クールな態度を持つ」として、新たに加えられることになった。そして残りの3項目はカテゴリー③「休息したり気分転換を図る」として探索段階(探索地点内行為から成り立つ。)のなかに位置づけられた。

モノ探し行動に段階設定をしたうえで、その間に“連続性”あるいは“機能的連関性”を想定することは、モノ探し行動を“過程(プロセス)”としてとらえることである。

そこで、この4段階をモノ探し行動の“進行過程”を表すものと考え、モノ探しの具体的行為が段階を経て変化していく様相を示すために、図1を作成した。

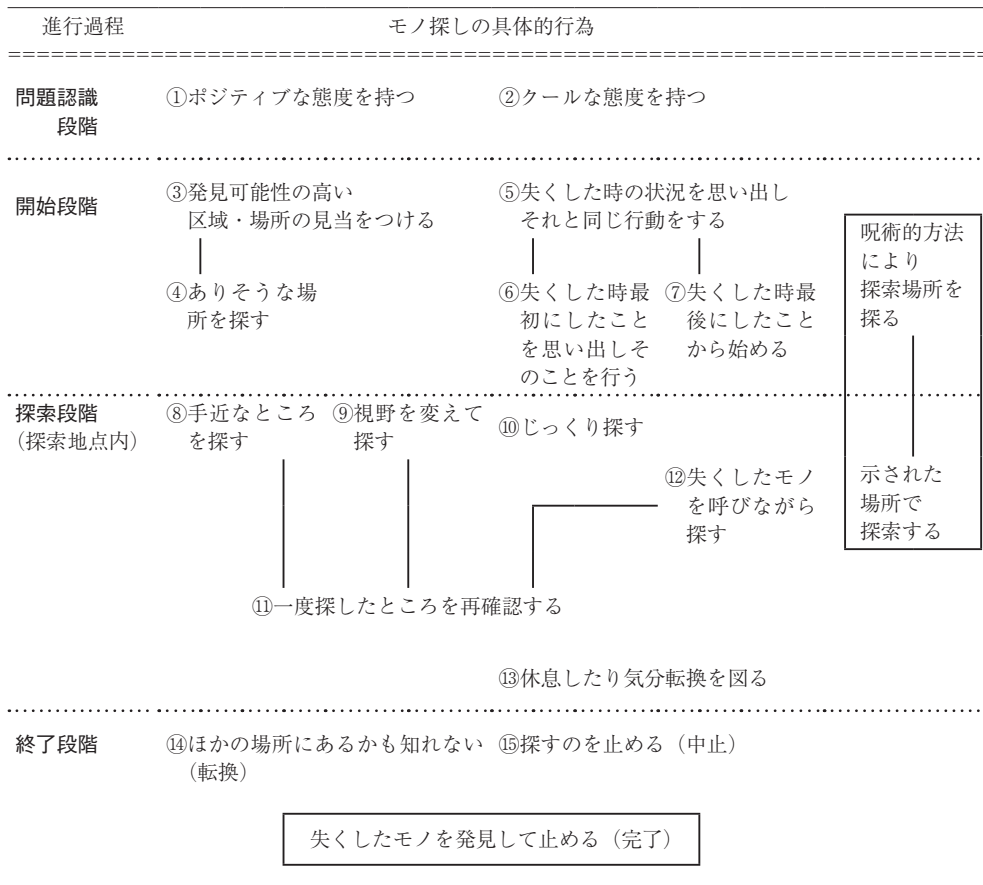


図1 モノ探しの進行過程に位置付けた具体的行為

また、この図1には、第4稿「モノ探しにおける呪術的方法」で示された知見の一部分も加えて、モノ探し行動をより全体的に表し、その理解を深めたいと考えた。

(3) 各段階についての補足的検討

1. 問題認識段階

モノ探しをすることが必要になった場合での探し手の“ポジティブな態度”と“クールな態度”は相互に独立した心理的要因として、両者がともに機能することが考えられる。ただ、その機能は問題認識段階だけでなく他のすべての段階で認められもので、モノ探し行動全体に関わるものと言える（佐々木, 2018. p.43.）。さらに、それぞれに強弱の程度

があり、その2次元がいかに組合されるかによってモノ探しに着手する姿勢が異なるだろう。その状態を2x2分割でモデル化したのが図2である。この図2では、それぞれの態度(positive, cool)の程度を2分割して英文字のイニシャルで表し、強い場合を大文字(P, C)で、弱い場合を小文字(p, c)で略記している。

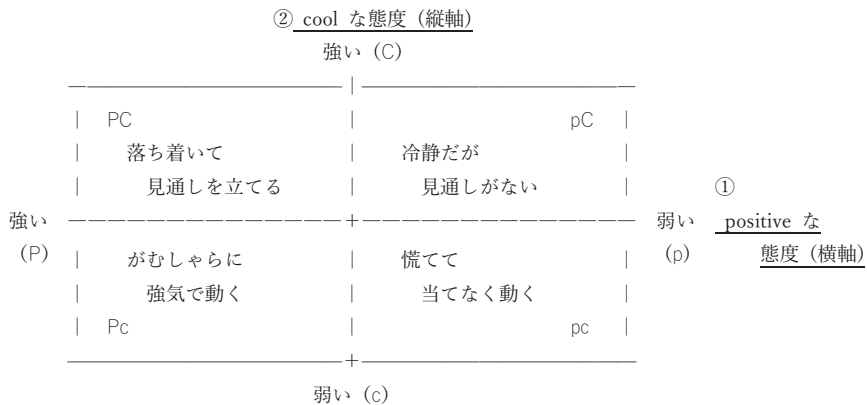


図2 問題認識段階の態度(positive, cool)の2次元モデル

この4タイプのなかで、両者がともに強い状態(PC)がもっとも望ましいが、われわれは常にその状態でモノ探しに臨めるとは限らない。その対応行動は、当面する問題事態の緊急性や必要性などの状況要因によって、あるいは探し手の個人的要因によって、異なるだろう。

2. 開始段階

ここでは第1稿(佐々木, 2018)で指摘しているモノ探し行動の基本的な方法である“区域的方法”と“継時的的方法”が示されている。区域的方法は③と④から成る行為群(クラスター)であり、継時的的方法は⑤⑥⑦から成るクラスターである。

この二つの方法は、実際のモノ探し場面では併用されるだろう。たとえば、開始時点で継時的的方法を採ったとしても、ただ時間順序に従って機械的に探索するのではなく、たとえば、モノ探しの進行のなかで発見可能性の高い場所の見当をつけて重点的にモノ探しをすることもあるだろう。

また、継時的的方法に、時間順序の最初から行う⑥の場合(順向型)と最後から行う⑦の場合(逆向型)があることは、興味深いことではなかろうか。この“順向型”と“逆向型”の違いには、おそらく、探索区域の広さや距離などの空間構造や移動手段の利便性などが

影響するだろうし、探し手の日常的行動パターンや成功見込みなども関係するだろう。一般化すれば、探し手が見積もる「コスト（所要時間、必要経費、心理的負担、身体的負荷など）」と「パフォーマンス（得られる成果、損失の回避など）」との利得関係が問題になる状況の一つである。

3. 探索段階

ここには“探索地点内行動”が示されているが、その行為はきわめて多様であり、さまざまに移り変わることが想定される。とくに探索地点は一か所とは限らず、その空間的關係や社会的機能の異同等の影響も受けるだろうし、それぞれの特定点内での構造的要因がとくに強く関連するだろう。また、カテゴリー⑫「失くしたモノを呼びながら探す」は、常に行われるとは限らないが、モノ探しの途中で目標の対象物を一時的に失念したり他に気を取られるという経験が稀でない高齢者にとっては実践的な行為であると言えよう。

4. 終了段階

モノ探しは目標の対象物が見つければ“完了”するが、見つからないと判断した場合は“転換”か“中止”をせざるを得ない。（現実には“一時停止”ということもあるが、これは“継続”の変形であり、“終了”ではない。）転換の場合には場所を変えてそのモノ探しが続行され、あらためて上記のプロセスを辿ることになる。中止の場合は、そのモノ探しを諦めることになるが、まさに「コスト対パフォーマンス」の見積もりが探し手にとって重要な状況である。第2稿（佐々木, 2019a）で述べた“小さなモノ探し”では中止される可能性が大きく、“大きなモノ探し”では転換が生じる可能性が大きいと推測されるが、その意思決定の分岐点には、対象物の価値だけでなく、状況的要因や探し手の個人的要因が関わることが考えられる。

5. 呪術的方法について

呪術的方法の利用は、第4稿（佐々木, 2020）で述べたように“最後の手段”とされることが多い。そして、“占い”や“まじない”によって探索場所が限定され、その場所での探索行為が行われるというのが一般的であろう。その際、遊び気分で気軽に行われることも少なくなく、呪術的方法への探し手の“期待”や“信頼”が問題になる。

3. 考察：モノ探しの進行過程について

(1) モノ探し行動を“過程”としてとらえる際に必要な条件

われわれのモノ探しでは、普通、空間的移動があり時間的経過を伴うので、そこに現れ

るさまざまな行為を“過程”としてとらえるのは自然なことであろう。

筆者は“過程”を構造的に見たとき、とりわけ“心理的・行動的過程”には次のような特徴があると考えている（佐々木, 1993）：

1. 複数の心理的・行動的な位相（段階）から成り立っており、各位相の主たる機能は異なっている。
2. それらの位相は機能的な関係を形成し、通常、その関係は時間的推移のなかで動態的にとらえられる。
3. それらの位相の間には連続性があり、相互に影響しあい、多くの場合、因果関係にあるものとしてとらえられる。

問題は、その“過程”をどのような現象でとらえるかである。心理学の視点では、その行動の外形的变化や心理的推移に着目することが主になるだろうが、さらに、その一連の現象を選択意思決定や感情的变化の問題として見るなど、接近法は多様である。

そうしたなかで、本稿がとったアプローチは、その外形的行為の変化に着目したものであるが、上記の特徴のすべてを確認できるレベルには至っていない。本稿では、モノ探しの具体的行為の一般的意味にもとづいて各段階を構成しており、あくまでも“思弁のモデル”の域を出ていない。各段階には、特徴1で述べている“主たる機能の違い”があることはそれぞれの言語的内容から理解されるだろうし、特徴2の「時間的推移がある」は経験的事象として了解されることではあるが、それを「動態的にとらえる」ことには到っていない。さらに特徴3で述べている「連続性がある」、「相互に影響しあう」あるいは「因果関係にある」などは、“希望的見通し”があるとはいえ、実証的には確認されていない。

しかし、こうした事実を認識しながらも、“話を進める”ことは重要だと考えている。とりわけ未開拓な問題領域では、それが素材や刺激になり、より高度な理論構成や実証研究に通じることになるのは間違いないと思うからである。

(2) 実際の経験からモノ探しの“過程”を考える

われわれの経験的事象としてのモノ探し行動を要約的に述べれば「所有物や使用物を失くしたり置き忘れたりしたために、その所在（場所）の部分的記憶にもとづいて、それを発見できそうな場所で、その物（モノ）を“探す”こと」ということになる。ただ、この記述にはいくつかの条件を付帯することになるが、とくに 1. “発見できそうな場所”の数や広がり方（あるいは、続き方）によって“探し方”が異なる、2. “失くしたり置き忘れた物（対象物）”によって“探し方”が異なる、という2点は重要だろう。

他方で、『広辞苑』（第4版、1991年刊）が「探す、捜す」という言葉を説明して「人・物・所などを見つけ出すために所々をまわる。さぐり求める。尋ねる。」(p.1012)と述べ

ているように、一般的に「所々をまわる」という現象が認められることにも留意すべきであろう。

言うまでもなく、われわれの“モノ探し”には、最初から特定の1ヵ所で行われる場合があり、その空間がごく狭い場合もあって、常識的には上記の「所々をまわる」という「やや広域の空間で順番に移動する」ことを意味する表現が当たらないこともある。しかし、そうした状況でも、その狭い空間内で探し手が移動することがあるし、一つの空間的地点に立ち止まっても“見渡す”とか“あちこちに手を伸ばす”などの身体の向きを変える動作が見られることもあるだろう。つまり、「所々をまわる」という表現がピッタリとは当たらないような、探索場所内での探し手の身体的移動が大幅でなくても、そこでは複数の動作（行為）が連続的に行われ、それに伴う心理的变化が生じているはずである。

重要な点は、“モノ探し行動”では、こうした行為や心理的現象の変化の連続的状态が、その規模や程度にかかわらず生起していることである。

(3) モノ探しの“進行”についての見方

モノ探しの“進行状況”や“進捗度”は、第1稿で提案した「STピラミッド型モデル」の重要な要因とされていた。つまり、モノ探しの“進行”は“探索区域（Space）の縮小”と“探索時間（Time）の短縮”として現れるとし、その連続的な様相をピラミッド型の図式で図3に示すように描き（佐々木、2018. p.82）、また、モノ探しの“進捗度”は“限度度”と重なることを述べていた。すなわち、図Fで4角錐の高さは進捗度を意味することを明示し（p.82）、図Gでは“開始→中止／続行→完了”という3段階で表していた（p.83）。

このように、“進行”はモノ探し現象の特徴的な側面を記述する重要な概念として位置づけられていた。

他方で、本稿では、モノ探しの“進行”を具体的行為の変化が連続的に現れる過程としてとらえ、モノ探し行動を成立させる多面的な行為の関連を包括的に意味するものとして、モノ探しの行動的構造を記述するだけでなく、分析する際の重要な概念であると考えている。

要するに、筆者は“進行”という概念を、第1稿ではマクロに描いたモノ探しの変化を包括的に表すために用いていたが、本稿ではよりミクロにとらえたモノ探し行動を多面的な行為群から成り立つ現象としてとらえている。

このような“モノ探しの進行”についての二つの見方の中間的な位置にあるのが、第1稿で述べている「ST2次元空間モデル」であろう（佐々木、2018. p.80）。

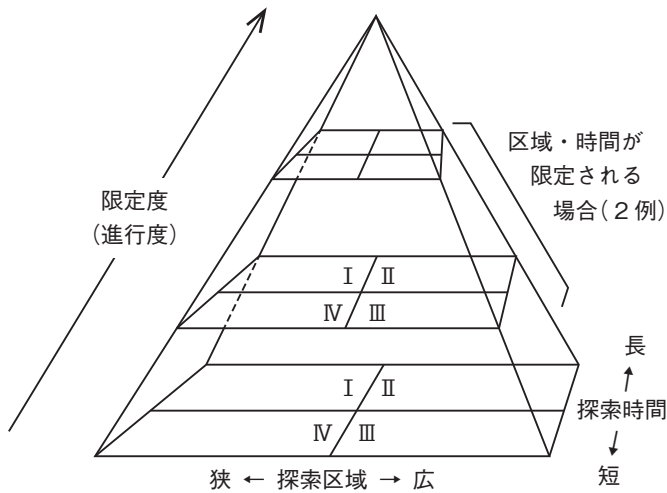


図3 “モノ探し行動”に関するSTピラミッド型モデル(佐々木, 2018. から)

このST 2次元空間モデルは、“探索区域の広さ(広い～狭い)”と“探索時間の長さ(長い～短い)”という2次元から成る現象的空間を仮設し、各次元を2分割して構成される4象限が、次のように例示される「モノ探し行動」の4タイプに対応していると考えられるものである：

象 限	探索区域	探索時間	モノ探し行動の特徴(例示)
I	狭い	長い	丹念な探し方
II	広い	長い	当ての無い探し方
III	広い	短い	おおまかな探し方
IV	狭い	短い	的を絞った探し方

このST 2次元空間モデルには“進行”を表す概念は含まれていない。ただ、モノ探し行動の空間的・時間的な一局面を表しているだけである。(そのうえで、モノ探しの“進行”は、探索区域が“広い→狭い”という方向の、また探索時間が“長い→短い”という方向の、両面的な変化によって表され、その連続的な状態は2次元空間の面積が次第に小さくなることであるために、4角錐(ピラミッド型)で描き出されると考えているのである。)

しかし、ST 2次元空間モデルに例示されている4タイプのモノ探し行動をみると、これらの「探し方」には、それぞれ、本稿で述べている進行過程(問題認識→開始→探索→終了の各段階)が内在していると考えられるのが自然である。そして、本稿の図1に示しているような具体的行為が含まれていると想定することができるだろう。

4. 本稿のまとめ

モノ探しの“進行過程”にその具体的行為を位置付けてモノ探し行動の実像により接近することを意図したが、その目的は、図1に示している形で、ある程度果たしていると考えている。この情報が“モノ探し行動”を論じる際の基本的な知見になることを期待したい。また、日常生活の知恵としての“効果的な探し方”というような実践的方法を考えるために利用することもできるだろう。

他方、このレベルの“進行過程”のとらえ方は一般的な心理学的過程論で多くみられるものであるが、実証的データの裏付けがなく、あくまでも“机上デザイン”にとどまっているのを否定することはできない。前述の考察（1）で述べたように、過程論として未検証な部分を多く含んでいる。

今後、人びとのモノ探し行動に関する経験的データをより客観的・実証的な方法で収集することが必要である。本稿で用いた具体的行為はインターネット・サイトの開設者によって選ばれたもので、その人たちの個人的経験を含んで整理されたものであろうが、より普遍的な情報を得ることが望まれる。

そのような実証的方法の採用にあたって、本稿の表1や図1で示した情報が役立つことを信じたい。

参考文献

- 佐々木土師二（1993） 社会的行動の「プロセス」にどう迫るか。日本社会心理学会第34回大会発表論文集 S32-33。（東京大学，1993年10月開催。自主企画シンポジウム趣旨説明）
- 佐々木土師二（2018） “モノ探し行動”についての小考：「ST ピラミッド型モデル」の提案。関西大学社会学部紀要，第50巻第1号，75-88.
- 佐々木土師二（2019a） “小さなモノ探し”の行動論的分析：“モノ探し行動”についての小考(2)。関西大学社会学部紀要，第50巻第2号，79-90.
- 佐々木土師二（2019b） モノ探しにおける具体的行為とそのモデル化の試み：“モノ探し行動”についての小考(3)。関西大学社会学部紀要，第51巻第1号，31-45.
- 佐々木土師二（2020） モノ探しにおける呪術的方法：“モノ探し行動”についての小考(4)。関西大学社会学部紀要，第51巻第2号，91-108.

—2020.6.11受稿—

